ヴィーナス通信

Venous（静脈）Venus（護美の女神）

第32号

発　行　東多摩再資源化事業協同組合
理事長　紺野武郎　編集長　吉浦高志
東京都東村山市久米川町1－16－18
Tel&Fax　042－395－9788

資源リサイクルの岐路

昭和五十年台までのリサイクル事業は、資源回収業者と市民や企業間の民々事業で成り立っていた。しかし、バブルそしてその崩壊以来資源物の余剰化ごみ化が顕現し、この十数年間は自治体主導のリサイクル事業に様変わりした。

家庭系資源回収だけを見ても、ちり紙交換業は殆どいなくなり、集団回収と行政回収が主流となった。平成十四年多摩全域の集団回収量は、九万一千トンで十年前の二十三％増だった。しかし行政回収は、二十一万一千トンと、この十年で四倍近くも急増し、集団回収をはるかに凌ぐ結果になった。

再生資源の需要以上にごみ減量のためのリサイクルが普及したこと、プラスチックなどの難リサイクル性素材の使用が増大したこと、各種リサイクル法が施行されたこと、などの起因が考えられる。

だが、ここに来て行政の財政難を理由にまた情勢が変化してきた。行政直営事業の民営化は歓迎するが、委託業務や資源物売却値の入札、集団回収助成金の削減など見直しを実施する自治体もでてきた。

しかし、この十数年間厳しい市況の中で、低コストで、地域資源物の再生化に努力を重ねてきた地元の業者にとっては、更なるコスト削減を強いられる結果となり、深刻な打撃となっている。

集団回収事業にしても大規模で効率の良い回収は少なく、回収箇所や回収頻度は増えるばかり、行政回収も新聞の抜取りなどで手間のかかるものばかり残される。

リサイクル業は地域性公共性が強く、行政がらみの仕事以外にも市民や中小事業所との関わりも多様で、地元の高齢者やパートの働き場としても大きく貢献している。

競争入札となれば、地域外の業者や時には問屋やメーカー同士の喧嘩にもなっていたずらに競争を煽り、地元業者は共倒れや転廃業に追い込まれる事態にもなってくる。わずかな売価や経費の違いだけで地域に根ざしたリサイクルルートや雇用の場そして地元納税者を見殺しにしてしまうことにもなる。

十数年前、行政が直接資源回収に参入したとき我々は、個々の仕事を犠牲にして全面的に協力してきた。そしてこのシステムを軽率に変えることの無いように請願した。

ここで、資源回収と廃棄物収集を比較してみると、大きな違いがある。同じ各家庭から集める作業でありながら、そのコスト感覚に大差があるのだ。ごみステーションに出ている廃棄物をパッカー車に積んで市の焼却場に運ぶだけで、kg当り二十円以上四十円近く掛かっている自治体さえあると言う。

だが資源物は、古紙を例に見ても、少なくても五種類以上に選別しなければ流通しない。分別排出をお願いしても混合物や禁忌品の選分、ひもや袋の除去など大変な手間が掛かる。しかもプレス加工して製紙メーカーまで搬送して、kg当り十円前後でしか売却できない。

回収業者からの問屋買値はその半分以下だから、たとえ回収業者に僅かな補助金が出たとしても八円にもならないのだ。ごみ収集よりはるかに手間のかかる資源回収がさらに経費削減の対象になるのは全く解せない。

また「古紙は高くなった」と報道されるが輸出価格のみが一～二円上がっただけで、その輸出量も全体の十数％に過ぎない。加えて、資源物の輸出事業そのものが、いつ急変するかリスクも大きい。

漸く定着した地域のリサイクル機構を一時的な市況や行政の都合でまた安易に変えないで頂きたい。市民の協力で作った持続可能なごみ減量社会にも大きなリバウンド現象が起こると思う。

小平市リサイクルセンター

三年間の泣き笑い

前小平市リサイクルセンター所長　榎本文男

リサイクルセンターを去るにあたり、このたび「センターでの思い出」というテーマの原稿依頼があった。

普段より恥をかくことは得意であるが、ものを書くというのは苦手である。しかしながら、皆様に三年間お世話になったことのお礼を込め、最後の恥を曝すことに躊躇しながらも受託することにした。まずはセンターの概略から紹介したいと思う。

西武多摩湖線・青梅街道駅から歩くこと六分あまりの所に我が「小平市リサイクルセンター」がある。

朝礼で挨拶をする榎本前所長

平成六年に建設された我が家の総面積は約一万二千平方メートルを有し、さながら大豪邸の様相を呈する。その内、住まい（作業場）は東側にあり、西側には広大な庭園？までも用意されている。東側敷地には、母屋（ビン・カン選別施設棟）をはじめとしてペットボトル再資源化棟、貸家としての粗大ごみ展示施設（リプレこだいら）棟と適当な間隔を保った三棟の建物が存在する。

我が家族（東多摩再資源化事業協同組合とも言う）は二十余名の大家族で構成されている。上は六十歳代から下は二十歳代と様々で、男女比は女性が多く、さしずめ女系家族といったところである。このようなことから、笑い声は絶えることなく明るい家庭として近所でも評判？になっている。

仕事は家族全員で資源として搬入されるビンやカン、ペットボトルなどを選別し資源化することであり、皆その仕事に誇りをもって作業に就いている。

私は平成十四年四月にこの大家族の一員として迎え入れられた。当初は全く分からないまま、ただ右往左往するばかりの日々を送ったのを覚えている。また、この頃は再資源化の意味もわからず多くの家族にたいへん迷惑をかけていたことをいまさらに思う。早く一人前になり家族のひとりとして認められるよう必死になっていたということで許していただきたい。しかし、家族も二十余名ともなるとそれぞれの個性も違い簡単には受け入れてもらえず、当然のように苦労を強いられていたことも事実である。

小平市リサイクルセンター

さて家族の一員として自分には、主に家屋（施設）の維持管理という仕事が与えられた。頭脳を要求される仕事は所詮無理なことなので、この仕事は理に叶ったものと今でも思っている。そこで、三年間の我が仕事を振り返えることで「センターの思い出」と言う標記のテーマに近づけたいと考える。

最初に課せられた仕事は門扉のかぎ開けである。朝の七時半過ぎには開けることが日課となっていたが、寝坊などで遅れること数十回。その度に怖い形相で睨まれたことを思い出す。この朝の数十分がその後の作業に多大なる影響を与えること（モーニングティーの湯沸しなど）を知らされる？申し訳ない。

次に家族が働く建物の点検があ

現場作業員の作業風景

る。我が家は広大な敷地を所有する豪邸でもあるに関わらず建物はいたって華奢であり、到る所の外壁の劣化を見れば老朽化の波が押し寄せていることが感じとれる。

出来るところは自分たちで行うというのが我が家の家訓のひとつでもあり、家族の協力のもとこれまで多くの修理を自分たち自らが手懸けてきた。

ある時は高所での塗装作業を行っていた時、フォークリフトの上に長時間置いてきぼりというイジメにもあったが、今となっては忘れられない思い出でもある。そのようなイジメも一時であり、普段は楽しい家族に支えられていた。とくに作業休みの時間には、喫煙室で大人の勉強？をさせてもらったことは一生忘れない出来事でもある。

思い出の塗装作業の跡

三年間このような仕事の繰り返しであったが、自分にとっては欠け替えのない時間を過ごさせてもらったことに改めて感謝をしたい。

最後になるが先日、あるテレビ局でドイツの環境保護についての放映があった。確かフライブルグという都市だと記憶しているが、市民一人ひとりが環境問題について関心をもち、市全体が一丸となって細かいルールを策定し実践しているとのことである。しかし我が家に搬入される資源の中には、ルールを無視したものがまだまだ多く見受けられる。そのような環境の中で汗水を流し毎日働いている家族を三年間見続け、その姿を自分は誇りに思う。今後とも健康には十分留意するとともに将来の住みよい環境づくりに向け、家族一同頑張っていただきたいと切に願う。そして、不出来な自分を三年間支えてくれた多くの家族に感謝する。ありがとう。

榎本前所長には、組合員そして組合職員一同常に厳しくも適格なご指導を賜り、心から感謝申し上げます。三年間有難うございました。

近年の製鋼原料需給動向とその背景及び今後の企業経営

長沼商事㈱　代表取締役　長沼正夫

鉄の市況、国内需給を始め、ゼネコンや、電気炉メーカーの思惑等が絡み合い、また、国際的な需給により乱高下を繰返しています。１９９０年代の約十年間は比較的狭い範囲での推移が続いていました。しかし１９９７年夏をピークに下がり続け、２００１年夏には最安値を記録しました。この当時、公共事業は大幅に削減され、それに伴い電炉の生産は大きく後退致しました。同時に電気炉メーカーの再編も起こり、統廃合が進みました。メーカーは、減産による守勢に徹し、原料であるスクラップに対しては、「余りものに値無し」と価格の下落が進行しました。同時に、納入制限により、ヤードディラーにはスクラップが溢れていました。スクラップは発生主義ですから、価格に関わらず発生し、ヤードディーラーへと持ち込まれてきます。しかし納入制限で出荷できないといった事態に陥ったのです。そして、ヤードディーラーは海外へと視線を移していかざるを得ませんでした。この年、スクラップの輸出は、前年の倍を記録し、日本は、輸出国へと変貌していったのです。

そして、それ以降も高水準を保っており、その結果としてスクラップは、国内需給中心の価格決定から、国際価格連動へと変化していきました。主な輸出先であるアジア地区の需要は旺盛であり、当面この状況は変わらないと思われます。中心は中国、韓国、台湾の三ヵ国であり、２００４年も６８０万トンが輸出されています。

粗鋼生産という基準で世界を見回すと、世界最大の生産国は、中国で２億２千万トンであり、次いで日本の１億１千万トン、アメリカの９千１００万トンとなっています。世界全体の粗鋼生産が９億４千万トンですから、この３ヵ国約４５％を生産していることになります。

それでは、アジア地区ではというと、中国、インド、韓国、台湾、日本の５ヵ国で約４億３千万トンを生産しており、約４６％と世界の約半分を生産していることになります。ですから、我々は、近くにある消費者としてのこれらの国

の動向に注意しておかなくてはなりません。

この中での最大の消費者である、中国ですが、最近は政治的に不安定な局面も見えますが、経済では、ますます重要度を増して行き、今年度は、日本にとって最大の貿易国となることは間違いないと思われます。現在、スクラップ需要も旺盛ですが、ビレットの還付税撤廃など不安定要因もあり、今後の動向が注目されています。韓国、台湾も購買意欲に減退が見られ、調整局面に入ると思われます。

さてそれでは、関東地域での状況は、といいますとスクラップの発生量は７０万トン以上であり、一方の需要は５０万トン台であり、需給ギャップは２０万トン程度となります。つまり関東地区で毎月２０万トン程度ものスクラップが余る事になるのです。そしてこの需給ギャップの解消を目的とし、船による移送（関西方面へ出荷）及び輸出が行われています。これは、関東での発生量の３割弱にもなり、マーケットに与える影響は無視出来ないものとなっています。また、高炉の存在も無視出来ません。基本的にスクラップの需要家は電気炉メーカーですが、高炉の増産に伴ってスクラップの購入量が増えています。但し、品種も上級くずに限定されている為、上級品と下級品との格差が広がっています。しかし、名古屋で新日鉄がＨ２を試験購入しており、今後の動向が注目されています。

一方で、近年企業の社会的責任を問われる事件が多発しています。それは、我々資源を取り扱う事業者に於いても同じです。鉄は有価物であり、産業廃棄物の範疇から外れていますが、最近では、排出事業者責任の強化にともない、産業廃棄物としての契約、許可証の提示を求められる事が少なくありません。つまり、鉄スクラップ業者と言えども、最近では、産業廃棄物の許可がないと商売にならなくなりつつあります。廃棄物処理法は、毎年の改正でどんどん厳しくなり、未遂罪の適用や、「そそのかし」といった規制まで設けられています。いつまでも、定義のあいまいな「専ら物」に頼っていては、将来の展望はのぞめません。そして、今年度、優良化といった規定が盛り込まれました。これによって業者は優良業者とその他に色分けされる事になります。今後、排出事業者のリスク管理が厳しくなる事は間違い無く、この事は処分業者だけではなく、収集運搬業者についても同じです。たとえ、専ら物であろうと、排出事業者が許可証の提示を求めるのであれば、速やかに提出できる様に準備しておく。それが既存の顧客を維持する為の最低限の条件になると思われます。

排ガス規制、廃棄物処理法の強化排出事業者責任の強化など経営環境は年々、厳しくなっていきますが、これも社会が企業に対し求めている社会的責任の表れでしょう。市況も勿論注視しておく必要がありますが、それ以上に企業の経営姿勢が問われている時代でもあるのです。

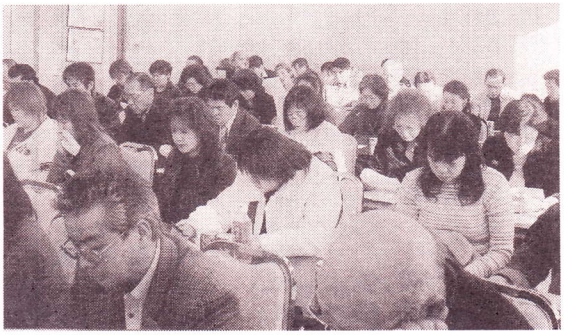
地域のリサイクルパートナーとして
信頼される業務の遂行を目指して
～安全教育講習会を開催～

去る三月二十六日（土）、当組合では、組合員・従業員五十四名を対象に、毎年恒例の安全教育講習会を開催した。

はじめに、紺野理事長がリサイクル委託業務に対する最近の状況について説明した。この中で紺野理事長は、「組合員・従業員全員が危機意識を持ち、安全第一を最優先しながら、市や市民により一層信頼されるような責任ある業務の遂行に努める必要がある」と訴えた。

続いて、土井副理事長・萩原副理事長が、服務規律や作業上の注意事項、勤務態度などの細かい安全要項について説明し、リサイクルセンターでの安全最優先と効率的な作業方法を再確認した。

さらに、今回の講習会では、組合従業員に、リサイクルセンターの業務に携わる者として最低限のリサイクルの知識を勉強してもらうために、以前に関係各市のリサイクルフェアでも行ったリサイクルクイズを実施した。



安全教育講習会

当組合が官公需適格組合証明を取得

中小企業に対する官公需発注の法的措置

官公需とは国や公団、地方公共団体（都道府県や市町村など）等が物品を購入したり、役務の提供を受けたり、工事を発注したりすることを「官公需」という。

官公需を受注するには、先の国等の機関に一般競争参加資格を申請し登録しなければならない。申請し審査の結果、ランク付けされて、その格付けに応じた予定価格の競争入札に参加できることになる。

官公需は種類が多く、支払いも安定していることから特に中小企業にとって、その受注は円滑な事業活動を維持する上に大変有効な手段であると云える。

この官公需の発注にあたっては法律で「官公需についての中小企業者の受注の確保に関する法律」（官公需法、昭和四十一年）が制定されている。官公需法では、中小企業に官公需の受注機会をできるだけ多く与えるために国が構ずべき措置等について具体的に定めている。例えば、国等は中小企業官公需特定品目に関する発注情報の提供。銘柄指定の廃止。可能な限りの分離、分割発注の推進。適正価格による発注。契約の相手方として組合を活用するように配慮しなければならないことも含まれている。

また、毎年度閣議で決定される「中小企業者に関する国等の契約方針」においては「国等は、法令の規定に基づく随意契約制度の活用等により、中小企業庁が証明した官公需適格組合を始めとする事業協同組合等の受注機会の増大を図るものとする。特に、官公需適格組合制度については、各省庁等は中小企業庁と協力しつつ、発注機関に対し、その一層の周知徹底につとめるものとする」と定め、官公需の発注に当たって官公需適格組合を積極的に活用するように明示している。

官公需適格組合とは

中小企業は大企業に比べて一般的に経営規模が小さく、経営資源が充分とは言えず信用や技術面で不利な状況にある。そのため官公需発注案件の中には中小企業者個々では対応が難しいものがある。その対応のため組合を設立しそこに結集することにより経営資源を補完し相互に協力、助け合い、一つの大きな力となる。組合員である中小企業者が一体となって組合の共同受注事業として受注すれば確実にその契約が履行できる。

組合の形態には事業協同組合、企業組合、協業組合等で、当組合は事業協同組合である。

これら組合は法律の手続きを経て国や都道府県が認可した法人であり、民主的かつ公平な運営が制度上確保されており、認可行政庁である国や都道府県が指導監督できるなど信頼性の高い法人である。

このようなことも官公需発注に際して組合を積極的に活用すべき大きな根拠となっている。

官公需適格組合制度は、これら組合の中で、官公需の受注に対して特に意欲的であり、かつ受注した契約は、十分に責任を持って履行できる経営基盤が整備されている組合であることを中小企業庁（経済産業局）が証明する制度である。

この証明を受けている組合は、次のような基準を満たしている。

組合の共同事業が組合員の協調裡に円滑に行われていること。そのための共同受注委員会の設置、検査員による検査体制が確立されている。官公需の受注について熱心な指導者がいること。役員と共同受注した案件を担当した組合員が連帯責任を負うこと。組合運営を円滑に遂行するに足る経常的収入があること。常勤役職員が二名以上いることなど。これら基準を証明するための申請には事細かな書類提出が必要で、中小企業団体中央会の指導、支援を頂き、今年一月十一日に官公需適格組合の証明を経済産業局より受けることができた。

官公需適格組合として当組合の決意

なぜ今、証明を受けたのか、その背景には、最近、いままでリサイクル事業に関心のなかった業種の参入が増加傾向にある事があげられる。しかし、リサイクルにおいては我が組合の個々の組合員が築いてきた資源物の収集から選別、加工処理のノウハウ、再資源化ルートの確実な確保など、他業種にはない長年にわたる実績の蓄積がある。官公需の共同受注体としてふさわしい組合である公的証明が必要となってきた。

今後とも地域に密着したリサイクルパートナーとして市民、行政と協力関係を強化しながら、発注機関の信頼に充分応えられる共同受注事業体であり続けるよう絶えず研鑽を積んでいく決意である。

容リ法改正に向けて
パネルディスカッション

去る三月十九日に「ごみ・環境ビジョン21」主催による「どう変える！容器包装ごみのリサイクル」と題してパネルディスカッションが国分寺労政会館で開かれた。

最初に（社）全国清涼飲料工業会専務理事の大平惇氏、稲城市の石川良一市長の講演があり、その後パネラーに大平惇氏、藤原哲重氏（小平村山大和衛生組合事務局長）佐々木義春氏（多摩R団連副代表）古林わか子氏（武蔵野市民）コーディネーターに　服部美佐子氏（ごみ・環境ビジョン21理事）でパネルディスカッションが行われた。

大平氏は、「リサイクルコストを商品価格に内部化しても三Rは大して進まないし、環境負荷の逓減にも繋がらない。また消費者はガラスビンより軽くて持運びに便利なペットボトルを選ぶ。生産者は消費者の需要性向に合わせて提供しているので生産者側だけにコスト負担を担わせるのは不当だ」と主張した。

これに対して服部氏はこれから目指すべき循環型社会を、立場を超えてどうやって実現していくか明確な発言がなされていないのではないかと、また藤原氏は現在ではペットボトルは指定法人では無償で引き取られるが民間ルートでは２５円で売れているそうで、そういった状況の場合は適正なコスト負担を事業者にするべきではないかという意見が出された。

佐々木氏は多摩地域のリサイクル施設の委託業務をしているが現在の容リ法はいろいろな面でコストが掛かりすぎ問題があるということだそうだ。

小林氏も容リ法での回収はごみ処理の三～四倍もかかり消費者としては、リサイクル経費は内分化していくのが一番で自治体が容リ法に乗れるシステムにしてほしいという意見が出され、主にコスト負担は事業者か価格内分化が討論されたが事業者と自治体・消費者の意見は平行線のままだった。

時間がなくなり司会の服部氏が今日の議論を踏まえお互いの立場を超えて話し合いを続けたいと結んだ。

（小畑和夫）

ごみ・環境ビジョン21セミナー

●国内製紙メーカーの現状

国内の紙・板紙の生産量は、十年前（一九九五年）の三千万トンを多少上回る数量で推移した。

国内の紙・板紙の需要に伸びが無くなり、横這いの数量実績になっているが、需要構造は次第に変化している。

こうした状況の中で、二〇〇五年十月一日付けで中越パルプ工業㈱と三菱製紙㈱の合併が発表された。

両者共に国内の製紙メーカーの中では中堅のメーカーで、それぞれ特色のある製品を生産している。

とりわけ三菱製紙㈱は写真の印画紙・感光材料分野では、トップメーカーであったが、デジカメとプリンターの普及がこの部分の収益を圧迫し、生き残りに向けて合併の道を選んだものである。

また板紙メーカーでは天間製紙が昨年倒産し、今年に入って井出紙業が破産した。

以上の状況からみて、今後とも中小製紙メーカーの統廃合は避けられない時代に入ったものと思われる。

古紙を扱う者として販売先の製紙メーカーがグループ化され、淘汰されることは、販路が狭くなる事を意味する。

リサイクル五五運動が目標とされた時から、古紙の回収率を上げること、利用率を上げることが循環型リサイクル社会を作るという意識を持って回収業に取り組んできたが、回収率が上がるほどに国内メーカーの使用量が増えない現実にぶつかっている。

このことが古紙回収業界の問題点である。

中国ほか東南アジアへの輸出で取りあえず余剰古紙のバランスを取っているが、一時しのぎに過ぎない。

この現状を解決するには、早く国内メーカーの統廃合に決着をつけ、真に国際競争力を持ち、生産を拡大できるメーカーが出現することが望まれるのだが。

（長澤常憲）

㈱ペットリバース・共働学舎を見学

去る二月一七日（木）、東資協青年部・東京都中小企業団体中央会共催で行われた見学会に参加した。

まず、川崎市にある㈱ペットリバースに行った。

ここは、ペットボトルからペットボトルを再生できるケミカルリサイクル工場である。化学工場らしく、場内は配管だらけといった感じで、担当の藤本さんのお話をメインに聞きながら、屋上から工場全体を見学するような形になった。

現在、数箇所の自治体と、一部産業廃棄物の廃ペットボトルを受入れているそうだ。再生後の原料は純製品の原料とほぼ変わらない純度だそうで、食品衛生法上の問題はクリアしているが、飲料メーカーとの調整中で、実用化はなされておらず、再生プラスチック製品の原料として利用されているのが現状だそうだ。

実用化されれば、いろいろと問題の多かったペットボトルのリサイクルに風穴を開けることになるだろう。

㈱ペットリバースにて

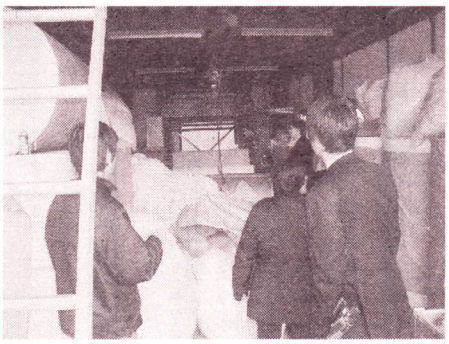
湯舟共働学舎内・喫茶室Doにて

続いて、町田市にある湯舟・小野路共働学舎へ伺った。ここは、社会福祉法人で運営する施設である。まず、施設内で営業している喫茶室で理事長の〇〇さんからお話を伺ったあと、施設を見せていただいた。

小野路共働学舎は中間処理場の資格も持っており、府中市などのペットボトルの受入れ、選別作業を行っている。

湯舟共働学舎では、ペットボトルのフレーク化や、小型ベーラーによる古紙の圧縮梱包、製紙会社から仕入れた大きなロールを巻き直し、切断して、オリジナルトイレットロールの作成などを行っている。

古紙は一般からの受入れの他、国会議事堂まで一五トン車で回収に行く他、国分寺市の荷物などを受入れているそうで、ここが福祉施設？と何度か驚かされるとともに、ある意味我々の同業、ライバルであることに少し脅威を感じた次第だ



湯舟共働学舎にて
トイレットペーパーのロール巻き

全体的には、今回の見学会を通じて、我々の業界の新しい取扱品目と、新しい形態の可能性を感じることが出来た。今後もアンテナを多方面に張り巡らせながら、業界の可能性を探ってみたいと思う。

（青年部　紺野）

トイレットペーパー
「ブーメラン」
（65m巻き・100個入り）
●地元の市役所・公共施設・事業所などから収集されたミックス雑古紙100%使用！
●塩素系、酸素系、苛性ソーダなど化学薬品を使わない無漂白品！
●東村山市・西東京市等の小中学校、公共施設、保育園などで使用され好評を得ています！
（価格）1ケース2,600円、10ケース以上1ケース2,470円
（いずれも消費税・配達料込）
ご注文は当組合までお願いします。
TEL&FAX　：042－395－9788

「多摩R団連」で視察見学会

大手製紙メーカー 興亜工業㈱

三月二五日興亜工業を視察した。同工場は、わが国有数の板紙を中心とした製紙工場で、富士山を間近に仰ぐ富士市北端にある。取扱製品と年間生産量は、段ボール原紙五二万八千トン・白板紙五万五千トン・更紙五万二千トンで、その原料として古紙を九八％使用している。

従業員は三五二名で三交代制のフル稼働をしていると言う。工場内は清潔で製紙メーカー特有の匂いも殆ど無く、コントロールセンター室以外は無人に近かった。

しかし、発泡紙や捺染紙、匂いのついた古紙などが原料に混入してトラブルと、少なくとも八千トン近い製品を廃棄して一連のパルパーやラインを清掃しなければならない大仕事になる。

そのような製紙原料にならない古紙は絶対に入れないで欲しいと訴えていた。

また、環境循環型企業を全面に謳ってゼロ・エミッションそしてリ・バリュー（自社から排出する廃棄物を価値ある物にしてゼロを目指す）を実行していた。

工場廃水のシビアな浄化、原材料の古紙から出る禁忌品類のサーマルリサイクル化・自家発電化などの徹底した環境管理は製紙本業にも増して印象を強くした。

（紺野）

興亜工業株式会社にて

関資連が 古紙問屋に「古紙抜取行為に反対する」宣誓をお願い

関東資源回収組合連合会（関資連）は、この二月より一都六県の全古紙問屋に、行政回収の古紙を抜取る業者との取引をしないよう宣誓してもらう運動をした。

他県から越境してきて新聞古紙などを抜取る業者が後を絶たず、各自治体には条例の施行をして頂くようお願いしているが、一部の古紙問屋が積極的に買い取っているから無くならないのも原因となっている。

そのため、問屋さん個々のホームページでリサイクル社会に「抜取行為に断固反対する」旨の宣言をするよう呼び掛けている。

抜取業者は、新聞古紙など取り扱いやすい物だけを、回収し易い場所から早朝に横取りして行く。

ちょうど通学時に住宅地を疾走してゆくのも非常に危険だ。

残された手の懸かるものだけを処理する方は経済的にも苦労を強いられることになる。

市民の皆さんも、貴団体が実施している集団回収の業者が抜取行為に加担していない業者（問屋含む）かどうか、必ず確かめて下さい。

また、抜取っている車両を見た場合、ナンバーを当組合に通報して下さい。

東多摩再資源化事業協同組合に所属している回収業者や古紙問屋は、抜取行為を認めず、そのような業者との取引も絶対しないことを宣誓している。

「資源抜取禁止条例」清瀬市、東村山で請願採択

当組合が請願した「資源抜取禁止条例」は、昨年十二月清瀬市議会の本会議で採択を頂き、この三月議会で東村山市でも採択された。

隣接する所沢市や新座市などが昨年条例を施行し練馬区も近いうちに設定する。

そのためその地域の抜取業者が当地域に侵入してきてさらに増えそうだ、多摩地区の各市も速やかに条例化に着手して頂くよう更に請願運動を進めたい。

組合員紹介

(有)フジノ

代表取締役　藤野祐子

会津磐梯山・白虎隊・猪苗代湖・鶴ヶ城で有名な、福島県会津若松市にて、長女と次男の二卵性双生児として生まれました。高校を卒業、上京、非鉄金属会社に勤務。仕事の内容は、工場から排出する品物（砲金・銅・真鋳・アルミ等）を各メーカーに収めていました。その頃から、ちり紙交換車が走ってたことを記憶しております。三年勤め、寿退社。二十一歳で結婚。主人の家は、古紙や鉄屑、銅などの回収を業としていましたので、私も主人や祖父と一緒に現場を回り仕事の手伝いをするようになりました。心地よい疲れを感じながら、達成感に日々満足しておりました。体を動かすことが、大好きで、仕事に感謝しております。長男そして二年後に次男が生まれ、子育てに手がかかり仕事「現場」からはなれてしまいました。子育ても楽しみながら、私も子供達に育てられたのかもしれません二人の子供が小学生高学年なってから現場復帰し、主人とトラックに乗り、荷積みを手伝って、お昼になると、うどんが大好きな主人はうどん屋・嫌いな私はトラックの中でサンドイッチ。今考えるとちょぴり残念な思い出となりました。子供たちも大きく育ち、一人は大学を卒業し、消防署のレスキュー隊員として、巣立ってゆきました。次男は大学を中退し、家業を継いで頑張って働いています。ちなみに大学中退は事後報告でした。五年前に、長男が結婚し、その時主人が親族代表として挨拶しましたが、家で何回も練習し、本番で大喝采あびて、満足顔：：。平成十二年、会津から私の両親が群馬の兄と同居し、二日後に母が入院六ヵ月後に亡くなりました。母は私のことが大好きで見舞いに行けば目で追って離さなかった。昔よく母が口癖のように言ってた事は娘を遠くに離して後悔してる。今更言っても遅いよ母さん。常にこぼしていたようです。静がでしとやかな母と騒々しい私……。父は九十四歳でいまだに健在です。十三年一月主人が仕事中倒れ、即入院。九ヶ月の看病むなしく他界してしまいました。五十九歳と四日。私と息子は大勢の方々の支援に支えられ今日まで歩むことができました。亡くなった当時は、まず、封書等が来なくなるのではないのかと今考えると不思議なことに気を取られていました。毎日時間になるとポストを覗きにいってる自分がいました。今でも続いています。もうすぐ四年目・仕事を残してくれてありがとうという気持ちでいっぱいです。私達は大丈夫だよ、一生懸命働いてるよ、ありがとう：：：：。息子との仕事は、お互いの持ち場を守りつつ、すぐに現場のことに口を挟まないでとのたまう。私としてはわざと言って息子との会話を楽しんでいるのに。主人が亡くなって四年の月日がながれ、仕事、仕事で無我夢中だったようにおもいます。

初心忘れるべからず。「まだまだ頑張らなくちゃっ」と自分に言い聞かせております。

(有)フジノ・藤野祐子さん

小平市が資源物持ち去り禁止の張り紙を作成

昨今増加している資源物の持ち去り行為に対し、この程、小平市は、持ち去り対策の一環として独自に持ち去り禁止の掲示物を作成した。「この掲示物を新聞古紙の束に張って出して下さい。」と市民に呼びかけ、職員のパトロールも強化している。

これは、私たち市民が、小平市に出した資源です。

資源持ち去り厳禁

リサイクル速報

平成十六年（一～十二月）

十六年暦年我が国の紙・板紙の生産量は、前年より微増の三千〇八九万トンだった。

古紙回収量は二千一五一万トン（前年比＋五・二％）で、回収率が六八・五％（同＋二・四％）・古紙利用率は六〇・四％（同＋〇・二％）だった。

国内で再利用できなかった分がアジア各国に輸出されたが、輸出量は二八四万トン（同＋四三・九％）と大巾に伸びた。

日本の古紙の十三％が海外に輸出されたことになる。

そのうちの約七〇％が中国への輸出だった。

昨年は、鉄屑の方も六八一万ﾄﾝ輸出しているが、これも前年より一〇九万ﾄﾝ増えていて、その殆どが中国向けとなった。

その他にも銅・アルミなどの非鉄金属やペットボトル・廃プラスチックなど中国を中心にアジア各国に大量に輸出している。

今、わが国のリサイクル事業は、近隣諸国との協力無しには成り立たない形態になってきた。

同時に急速な経済活動の拡大で、大量の原材料を調達しなければならないアジア各国も、日本とは共存共栄をはかり持続可能なリサイクル社会を目指して助け合ってゆかなければならない大事な時なのに、事あるごとに時代を巻き戻して反日感情を露呈する関係は改めて欲しい。

行事・行動

【平成一七年一月】

四日：仕事始め

七日：中小企業中央会新年会

：古紙センター新年会

一〇日：広報委員会

一二日：定例理事会

一五日：日資連理事会

一八日：ＲＣ責任者会議

二〇日：広報委員会

二二日：東資協新年会

二三日：関資連拡大理事会

二四日：東村山市廃棄物減量審

二五日：小平市廃棄物減量審

二七日：古紙センター業務委

三〇日：組合新年会

【二月】

九日：古紙循環プロジェクト

一一日：定例理事会

一四日：東村山市で抜取請願説明

一七日：財務委員会

一八日：ＲＣ責任者会議

二三日：古紙Ｃセミナー

：多摩Ｒ団連幹事会

【三月】

三日：関資連役員会

九日：抜取問題対策協議会

一一日：定例理事会

一三日：小平『緑友会』で講演

一四日：ＲＣ責任者会議

一六日：古紙Ｃ理事会・業務委

一九日：日資連理事会

：ごみ環境ビジョン21セミナー

二一日：業務委員会

：広報委員会

二四日：小平市廃棄物減量審

二五日：多摩Ｒ団連視察

富士市「興亜工業㈱」

二六日：組合員・従業員の安全講習会

【四月】

一二日：定例理事会

一三日：公益法人化発起人会

一六日：日資連理事会

一八日：広報委員会

：ＲＣ責任者会議

二〇日：東久留米廃棄物減量審

：財務委員会

二一日：古紙Ｃ業務委員会

：多摩Ｒ団連幹事会

二三日：関資連理事会

二五日：広報委員会

：青年部会議

二七日：段ボールＲ協議会

二八日：抜取問題対策協議会

リサイクル川柳

●議定書は
個人個人が
まず批准

●中国には
古紙を輸出（だす）にも
腰が引け

●古紙抜取り
腰抜け問屋が
見え隠れ
（改修業者）

編集後記

榎本所長様には、三年間お世話になり、リサイクルセンターの家族一同心から感謝申し上げます。

上海から二五〇kmくらい奥に杭州（ハンゾー）という都市があり、古紙の販売の為に何度か訪れました。風光明媚な所で、西湖という美しい湖と、海からの水が逆流して上ってくる場所でも有名な銭塘江があります。朝早く湖の周りを散歩すると、そこには沢山の人が二十名くらいのグループになって太極拳や武術の踊りを踊っています。又、年配の方が柄の長さが一mぐらいある、先の太い筆を持ち、湖の水を墨の代わりにつけて、コンクリートの地面に漢詩を書いていました。乾いては書き、繰り返す姿はとても素敵でした。行くのがとても楽しみな所でしたが、最近は反日運動のおかげで行くことが出来ません。杭州は日本企業のとても多い所で、デモは起っていないのですが、残念でなりません。絶対に仲良くしなければならない隣国なのですから、中国進出企業の為にも古紙のリサイクルの為にも、政府には日中友好に頑張ってもらいたいものです。

（吉浦高志）